

北野天使と遺伝子侵食 その2.

品種登録係 清水 弘

会報第35号にて「ノハナショウブの純血性」の話をした。その内容は山口市内にある二ヶ所の自生地の中の一つ「吉田」では、自生地中に栽培品種が持ち込まれた結果、この自生地ではノハナショウブが持っていた自然の性質（遺伝子）が急速に失われて行くという侵食現象（遺伝子侵食）が起こっているのではないかというものであった。今回は小生が何故そのような事を意識するに至ったかの三つの出来事を紹介したい。

1. シベリア産ノハナショウブとの交雑

20年前、早咲き品種を作る目的でシベリア産ノハナショウブ（超早咲き）の花粉を自宅の栽培品種と交配したことがあった。雑種第一代目はすべて紅紫色の花であったが、両親の何れよりも草丈が大きくなった（雑種強勢）。その後、数代を繰り返す内に草丈は低くなったが、その替りに色々な花色のものが現れ、ふと気づくと、それらの外見は山形県長井市にある「長井古種」に近似していた。当時、30代の若さであった私は大胆にも協会の研究会で「長井古種といわれるものの一部は長井に自生していたノハナショウブと江戸系花菖蒲とが交配したもので、江戸花菖蒲の退化品種であると思う。」と言った。今考えると、当時は栽培品種を良しとする花の見方であった。それから十数年後、加茂花菖蒲園の永田敏弘氏と共に、地元研究家の柿間俊平氏の案内で長井あやめ公園や近在の自生地を訪れた。そこでの観察結果から長井古種と呼ばれる栽培品種の中には、他系との交雑により生じたもの（浸透交雑種）が含まれているという推定が確信へと変わって行った。

2. 雲南省での出来事

10年前、雲南省へ新発見のイリス属植物を見に出かけたことがあった。お目当ての新種



は何とか見ることが出来たが、その帰路、既知種に近いが花色パターンや蜜標の形に変化の多い群落に出くわした。不思議に思って周辺を観察していると、斜面の上方からチベット犬の鳴き声がして来た。地形や周囲の環境をチェックして見たところ、もともと標高によって別な2種が住みわけていた中間地にチベット人が自然植生を切り開いて家を構えた結果、昆虫の通り道が出来きて2種間で自然交雑したと思われる場所であった。

3. 二ヶ所から届いた写真

5年前、信州にある唐花見湿原を訪れた園芸仲間から1枚の写真が送られてきた。カキツバタの自生種を観察に行ったところ、まだ開花していない自生のノハナショウブ群落の中に1本だけ派手な花が咲いているのでこの花は何だろうか？という趣旨の問い合わせであった。明らかにそれは栽培品種（早咲江戸系花菖蒲）であったので、私も愕然としてしまった。自然状態ではノハナショウブの方が強いと思うかもしれないが、実は栽培品種の中には自然状態でもノハナショウブよりも性質の強いものがあるし、両者の雑種には雑種

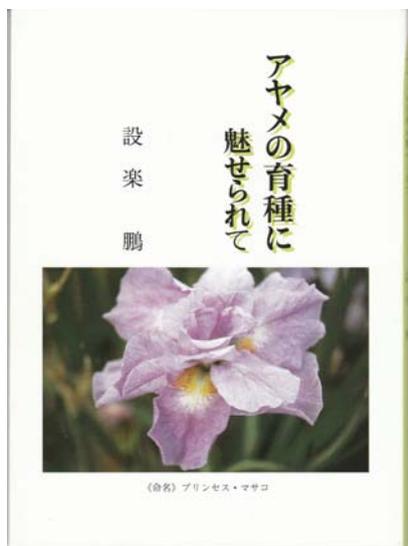
強勢が見られる。たった1株の栽培品種であっても、ノハナショウブの自生地にその花粉を飛ばし子孫を残して行く結果、本家であるノハナショウブが駆逐され、栽培品種の血を引く強勢の雑種が生き残って行く確率が高くなる。そして、もう1組の写真は、会報第35号に載せた吉田の自生地からであった。

小生の本職は医療技術者なので本職からの観点でものを見るところがある。地球という惑星が一個体であり、我われ人類は地球表面を侵食しているウィルス的一种であるとの見方である。このような感覚でノハナショウブのことを考えると、我われ人類がある種の操作をして作り出した栽培品種を、自然状態の自生地に持ち込むことは決してしてはいけないことである。バケツに入った真水の中にインクを垂らし込むようなもので、間違いであったと後から気づいて、何とか篩で取り除こうとしてもどうにもならず乱獲より始末が悪い。他方、雲南省で見た2種の浸透交雑している場所に立った時、最初は交配実生を育てている畑を歩いているような錯覚に陥った。これは育種家の感覚であるが、そのようなことを知らない一般の花好きにとっても、単純に花の変化を楽しむことの出来る花園である

し、そのような中から自分の好きな花を選び出したくなる花好きがいるに違いない。

遺伝子侵食の結果生じた植物、特に観賞用植物に対する価値観にはこのように相異なる二つの見方があり、立場によって異なった態度が現れるのだろう。知識人を中心とする自然保護派と人間中心のエンジョイ派である。花菖蒲を扱う現代の我われがこの遺伝子侵食の問題を考える際には、一種の理念や哲学が必要なのではないだろうか。《現在の自然は未来のもの達からの借り物である。》更に言えば《現在の自分の肉体は、祖先からの遺伝子の乗り物である。》との謙虚さが必要ではないだろうか。浸透交雑種はノハナショウブから栽培品種へと変異が連続していて切れ目がない。これを曖昧なまま見過ごして栽培家や菖蒲園関係者がノハナショウブと浸透交雑種とを区別なく取り扱って行くと、事の是非が判らない人間が単に綺麗だからと行って、ノハナショウブの自生地に栽培品種を持ち込むという行為を増長させてしまうのでないだろうか。例え1株でも栽培品種の持ち込まれた自生地の植物は、もはやノハナショウブと呼べるものではない。それは浸透交雑種と呼ぶべきであるというのが品種登録係からの意見である。

トピックス 設楽鵬さん「アヤメの育種に魅せられて」を出版



長年、当会の会員でおられる川越市在住の設楽鵬さんは、本年で100歳を迎えられました。

いうまでもなく氏は、わが国に自生するアヤメの変異品と欧米で改良されたシベリアアヤメとを交配して数多くの品種を作出されました。特に六英咲き、八重咲の品種改良では世界をリードする実績を残しました。その昔、氏の圃場を見学させていただいた折に、『夢の中でも好きなアヤメに会えるように、アヤメの種子を入れた枕で毎日寝ているんだ。』と自慢している話が強く印象に残っています。氏は平成21年8月に「アヤメの育種に魅せられて」という本を自費出版されて、お元気に活躍されています。(清水記)